

足立一久さん「篩・曲物づくり50年」

01 曲物職人 新潟の名工	平成19年(2007)4月6日(金)
02 災害に見舞われた30年代	平成19年(2007)4月13日(金)
03 東京へ	平成19年(2007)4月20日(金)
04 デパートへの売り込み	平成19年(2007)4月27日(金)
05 免許皆伝	平成19年(2007)5月11日(金)
06 職人として	平成19年(2007)5月18日(金)
07 お客さんと呼ぶ品物	平成19年(2007)5月25日(金)
08 電子レンジとワッパ	平成19年(2007)6月1日(金)
09 試行錯誤の時期	平成19年(2007)6月8日(金)
10 茶道具に取り組む	平成19年(2007)6月15日(金)
11 何とかしなければ	平成19年(2007)6月22日(金)
12 クラフトマンクラブ発足	平成19年(2007)6月29日(金)
13 ゼロからの出発	平成19年(2007)7月6日(金)
14 新聞報道をきっかけに	平成19年(2007)7月13日(金)
15 第1回新潟県のクラフト展	平成19年(2007)7月27日(金)
16 次のステップ	平成19年(2007)8月3日(金)
17 厳しい指導	平成19年(2007)8月10日(金)
18 新商品開発に取り組む	平成19年(2007)8月17日(金)
19 思ってもみなかった出来事	平成19年(2007)8月24日(金)
20 職人冥利	平成19年(2007)8月31日(金)
21 百年物語のスタート	平成19年(2007)9月7日(金)
22 百年物語のものづくり	平成19年(2007)9月14日(金)
23 ドイツの国際見本市へ	平成19年(2007)9月21日(金)
24 よりよいものづくりを目指して	平成19年(2007)9月28日(金)

◆ 01 曲物職人 新潟の名工

昭和33年に、高校卒業と同時に家業である篩製造業の跡取りとして従事しました。以来、一生懸命にお客さんに応えるべく励んできました。『朝の随想』の出演の機会に振り返ってみたら、ちょうど50年になるようです。よくまあ、もったものだと呆れたり、感心したりしています。この間にどれくらいの数の篩を作ったのだろう。何万個か何十万個か、数えてみる気はありませんが、ひたすら一生懸命に作ってきました。ああそうだ、“篩”ってお分かりでしょうか。穀物とか粉など、細かいものと粗いものをふるい分ける道具です。私のところで作るものは、ヒノキを3mmから10mmくらいの板にして、それを煮て、曲げて、桜の皮で留め、それに使用目的により鉄網、真鍮網、ブロンズ製の網、馬毛の網、絹糸製の網を張ったものです。その他に、赤飯を作ったり麴を作るときにお米を蒸かしますが、その時に使う「丸蒸籠」、料理の和え物をしたりする時に使う「裏漉し」なども作ります。私が家に入った頃は、米を選別するための農業用の篩がダントツ売れていました。その他、蒸籠も売れました。その頃は年中行事も盛んでしたし、また昔からの生活習慣もあまり崩れていませんでしたので、蒸籠も売れました。例えば、お彼岸になれば団子づくり、暮れになれば餅つき。そんな時代でしたので、どこのご家庭でも蒸籠の2つや3つ、粉をふるう篩の2つ3つと使用していただいていたいました。この寺泊の山田という部落は、その当時は60戸からの集落でした。そのうち約半分くらいの家で、何らかの形でこの篩製造業に関係し、かつ行商という商形態で製造、販売していました。「誰それはあっち方面、俺はこっち方面」と、正月の11日になるとみんなで寄り集まって、話し合っ決めていました。そうそう、正月というのは2月でした。いわゆる旧正月というものでした。子供の頃、みんなと一緒になく、「篩屋ばかりが旧正月なんて」と差別感を感じていました。それは特別な理由があったわけではなく、暮れの餅つき、小年の餅つきの蒸籠づくりが忙しいためだったのです。そんないい時代に家に入ると、腕のいい職人さんが2人と父がいて、その人達のもとで刃物研ぎや続飯(そくい)練り、山桜の皮こきから仕事に入りました。部落内も半農半漁半篩屋と、田舎としては安定した暮らしぶりでした。しかも篩屋は行商をしていたので、世間の話もし合うので・・・今で言う“情報”ですね・・・もあり、活気のある集落でした。

◆ 02 災害に見舞われた30年代

私の住んでいる山田というところは、寺泊と出雲崎のちょうど中間で、国道402号線沿線沿いに位置したところ。道路を挟んで両側に軒を連ねて家が立ち並んでいます。かたや日本海、その向こうに天気がいい日には佐渡ヶ島がくっきりと臨めます。また裏の山は急傾斜ではありますが、春にはウグイスがさえずり、山菜も取れるところです。よそからお出でになられた方たちは「のんびりとした、のどかないいところですね」と言ってくださいますが、ここで暮らしている者にとっては台風シーズン頃から冬にかけて吹く日本海の強い風と高波には本当に悩ませられます。昭和36年にはこの出雲崎から寺泊にかけて集中豪雨があり、山崩れが起きて大変な被害にあい、3名の死者が出てしまいました。田んぼも山崩れのため埋まってしまいました。その上、道は何ヶ月にもわたって不通の状態でした。私のところでは、幸い家は大丈夫でしたが田んぼは壊滅状態でした。秋の篩の時期を迎えるために、材料の曲輪と金網をたくさん仕入れて、運送会社の倉庫に預かってもらっていましたが、そこも被害を受けてまったく使い物にならない状態となりました。それは8月6日でした。このあと、9月の十何日か思い出せないのですが、第二室戸台風に襲われ、道路が開通したら山林の木を売って田んぼ等の復旧費用にあてようと目論んでいたのですが、その山林の木が折れてしまい、父は本当に困った様子でした。でも気を取り直してみんなで力を合わせて頑張ってきたところ、38年の冬の大雪・・・いわゆる「38(サンパチ)豪雪」と命名されたあの大雪です。しかし、世の中は39年に開催されるオリンピックによるオリンピック景気と所得倍増政策の下で、他産業は好景気です。勢い、村の若い人たちは転職したり、あるいは職場のある便利なところへ転居したりしてしまいました。またちょうどその頃から、農機具の発達と普及のために篩の需要が急速に減退してしまいました。しかし、なんにも売れなくなったのではないので、残った十数名の人たちと今まで通り篩屋を営んでいました。私のところのお得意さんは、お菓子屋さん、料理屋さん、機屋(はたや)さん、染物屋さん、鋳物さんが多く、その他どの街にもあった金物屋さん、荒物屋さんに卸していました。ですから、篩がそんなに売れなくなるという実感はそのころにはありませんでしたが、村が同年代の人たちがいなくなってしまったことと、篩の先行きのことを考えると、これから先どうしたらいいのか焦燥感に駆られる一方でした。

◆03 東京へ

篩屋は山田ばかりでなく、新潟市にも長岡市にも、柏崎市、三条市、加茂市、十日町市等にもおられました。その人達の何代か先の人達が、この山田の出であるお方もおられました。少ない同業者なので親しく交流し、材料なども融通し合っていました。会うたびに色々話を聞いたりしていました。やっぱり人口の多いとだめだなあ、と思い始めてきました。昭和40年代の初め頃でした。「人の一番集まっているところといえば、やっぱり東京だなあ。東京で何とかならないかなあ」とあれこれ考え、行ってみるのが一番だと、さっそく「東京へ遊びに行ってくる」と親父に言って、夜行の『天の川』に乗って上野に着きましたが、ふっと、どこの料理屋さんの板前さんだったか思い出せないが、「築地とか河童橋で買ってきた裏漉しだ、篩だ」と言っていたことを思い出し、「そこはどの辺で、どういけばいいのか・・・そうだ、駅員さんに聞こう」と思って改札口へ行ったら、「忙しいから案内所へ行け」と言われ、そこで教えてもらうと「あの売店に地図があるから、それを一冊持っていると便利だよ」と教えてもらいました。そして最寄りの駅へ着いたが、はて、どっちの方向に行けばいいのか。今度は交番へ行って築地の道具屋街までの道順を教えてもらい、道具屋街をつぶさに見てまわりました。ここは、業務用の裏漉しが山のように並んでいました。次に、日本橋の荒物関係の問屋さんの中で篩類のあるところとか、浅草のかっぱ橋の商店街も見歩きました。3、4日して家へ帰って考えてみると、父の作る裏漉しならいけるのではないかと思えるようになりました。まだ私は裏漉しは作らされてなかったので、父が作ったものをごまかして、一通り揃ったところでそれをまた隠し持って、「東京へ遊びに行ってくる」と言っては出かけ・・・そんなことを3、4年くらいしていましたが、成果があらず、諦めなければならないかなあと。駄目な理由は、裏漉しの場合は毛網が切れたとき張り替え修理が必要だったのです。その頃は今のように宅配便がなかったので、輸送がネックになりました。しかし、まだデパートへ行っていないなと気が付きました。デパートというと敷居が高く、伝手もなしで行ってどうかという思いもありましたが、ダメ元で飛び込んでみました。

◆04 デパートへの売り込み

デパートに入ってみたものの、広くてどこへ行けばいいのか見当もつかず内心焦りました。面の皮を厚くして「そうだ、食堂へ行こう。そこへ行けば板前さんもいることだし、そこでまず品定めをしてもらおう」と考えて、最上階へ向かいました。ツカツカと図々しく調理場に入り、調理台の上に持って行った裏漉しを並べていたら、「お前なんだ、何してるんだ」と若い人に怒鳴られました。「この裏漉しを見て、良いか悪いか鑑定してもらいたいのだ」と必死になって言っていましたら、次々と何人もの人たちが出て来て、仕方なく耳を傾けてくれるようになり、最後に出て来られた人がじーっと裏漉しを見ていて、店の方の人を呼んでくれたようで、裏漉しを手に取りながら何やら話をしておられました。そのうちに店の人に「これを持ってこっちへ来い」と言われ、事務所に連れていかれました。「なんで裏漉しを持ってきたのだ」と訊かれ、「これからは日本の暮らしが豊かになってくるので、家庭料理も盛んになると思う。そうすれば裏漉しも必需品になるのではないかと思う」。思いつくままに答えました。「君はどこに泊まっているのだ。明日はその宿を調べて迎えに行くから、宿にいるように」と言われました。翌朝になると、「迎えの車が来た」と宿の女将さんが慌てて呼びに来られ、その車でデパートへ連れていかれました。そして、「今日は伊東深水の個展を見に行くぞ」「今晚はカラヤンのチャイコフスキーを聴きに行くぞ」「今日の昼食は立ち食いのうまいカツ丼を食べよう」と連れていかれる。3、4日そんなことをしてもらっていい気持ちで過ごさせていただき、ちょうど竜宮城にいるような気分でした。いよいよ財布の中も乏しくなってきましたので、朝のうちに「今夜の夜行で帰ります」と伝えておきました。帰る時になったら、持って行った裏漉しのうちの一番いい本物を出して、「この技術で家庭用の裏漉しとして6寸と7寸のものを見本として200個ずつ作って、この宛名で10個か20個ずつ送るように」と言われ、「値段はいくらに作ればいいんですか」と聞いたところ、「作ってみなければわからないだろう。送るときに納品書を一緒に送るように」と指示されました。「見本で200だから、デパートっておっきいのだなあ」「200も店があるのかなあ」と考えながら帰路に着きました。

◆ 05 免許皆伝

「見本を出すように」ということになった嬉しさと、果たして採用になるか。帰りの汽車の中は一人興奮状態で、まんじりもしないで長岡駅に着いてしまいました。帰ったら父にどう話したらいいか、どう説明したらいいのか、考えながら帰路につきました。帰って、ここ数年の東京行きの概要と、この度のデパートの見本の件を話しましたが、父は「何を言ってるんだ」というような様子でしたが、まずひと眠りしないことにはこっちもどうしようもないので寝ました。起こされた時は夕飯でした。ご飯を食べながら、また話しました。なかなか理解してくれません。まず「デパートが紹介者もなく、直接行ったお前みたいなものを相手にしてくれるわけないだろう」の一点張りです。しかも「家庭用の裏漉しの三本毛の網というものはないし、それを張るとした時、今ある曲輪では無理だ」と聞かされ、そういうことを分らず飛んで騒いでいた自分の未熟さを痛感しました。でもやっと見出したチャンスですから、なんとかしなければと改めて思い直し、毛網はどこから仕入れているのか、この曲輪はどこでできるのか母に聞いて、相手と交渉しお願いして、材料を揃えて父から作ってもらって、第一便を出荷したのは3ヶ月ぐらいかかったようでした。その頃は私の技術はまだまだでしたので、裏漉しは作らされなかったのです。父の言いつけで部分部分の仕事のみでしたので、早く一人前の職人になりたいと頑張りました。3年くらい経った頃になると、材料の方も順調に入ってくるようになり、製造の方も手順も慣れてきて、数もあがるようになりました。売れ行きも順調に伸びてきて、それから正月、春先にかけては品不足の状態になってきました。そこで、デパートの方で「間に問屋を入れて、そこで在庫を持ってもらったらどうか」と言われ、日本橋の問屋を紹介していただきました。この問屋なら君の品物を大事に扱うだろう、と。以来、その問屋さんとは20数年の取り引きが続き、そこを通じて全国展開までになりました。この時を機会に、父に「作ることは全部教えたので、後は使う人、お客さんから習え」と、免許皆伝となりました。

◆06 職人として

何事も「3年ということは大事だ」と言われますが、私にとってもこの3年余りの時間は、今振り返ってみるとまさにそれだったのだなあと考えられます。仕事の面では、父の手伝いのようにありましたが、ひと時の許しありませんでした。また、時にはデパートの部長さんから「洋行して来たから、話を聞かせる。冷めないうちに早くくるように」と電話いただき、私の知らない外国のものづくりの事などを教えていただいていた。例えば「ドイツにはマイスター制度というものがある。心ある職人はそれを目指して励んでいる。マイスターになるには、技量はもちろんだが知識も伴わなければならない」とか、「更に外国で2カ国は修行しなければならない」など。今私が親しくさせていただいているクリストフ・ヘンリッセンさんというドイツのマイスターの宮大工さんは、アメリカではどういうところで学ばれたか分かりませんが、日本では法隆寺の西岡常一さんに頼み込んで、法隆寺の修復の時にスタッフに入れていただいたそうです。以来日本の木工が好きで、時には日本に来られるとのこと。もちろん、大工道具は日本産の物をたくさん使用されているそうです。・・・話をもとへ戻します。デパートの部長さんは、時には鋭い質問もされるのです。例えば「なぜ馬毛の裏漉しは良いのか」と訊かれますので、「植物の中の消化しない繊維を取り除きますので、おいしいものができるのです」と説明すると納得していただきましたが、「では、篩はなぜ桜の皮で留めるのか」と訊かれた時、答えられませんでした。「調べて返事を持ってくるように」と言われました。「自分のしている仕事の意味も分からないままで作っているようではだめだ」と大カミナリでした。また、ある時は「美術サロンでお茶道具展が開催されているから、しっかり見ていくように」とも言われ、「お茶道具というのは、色々ある道具の中で最高な部類のものだから、しっかり見て、自分のものづくりの中で活かされるところは活かして、しっかりとしたもの作る職人にならなければならないぞ」と教えられ、機会がある度に見るように心掛けていました。いつか自分も曲物のお茶道具を作られるようになりたいなあ、と思いながら見ていました。

◆ 07 お客さんを呼ぶ品物

ある時、デパートの部長さんが突然「これだけの裏漉しを、デパートが買ってくれていると思っているのではないか」と訊かれ、一瞬答えに面食らいました。「違うんだよ。ここで買って行ってくれる人がお客さんなんだ。デパートは、君の作った品物を買ってくれる人たちとの出会いの場なんだから。買って使ってくれる人たちとは、普通の場合顔も合わせることは滅多にないだろうし、名前なんて知るよしもない。だからといって、ちょっとくらいいいやというような仕事をしないように。物がお客さんを呼んでくるようにならなければならない」と言われました。家庭用の裏漉しとは言っても、デパートとしては“プロの人が使っても遜色のない、グレードの高い商品開発”というような捉え方で店頭で並べて売ってみるということで、200個の見本と言われたのだそうですが、私は「店が200もあるのかと思っていた」と言いましたら、みんなに大笑いされました。それと、納品の締め切り日と支払日というものははっきりしていて、送金してくれるのだということも分からず、初めの頃は「いつ集金に行くのか」と父の気を揉ませていましたが、ちゃんと送金されてくるので安心して作ることに専念していました。「裏漉しだけでなくもっと他の品物もないのか」と言っていただけるようになり、色々提示していましたが、その中で「わっぱ飯用のわっぱ、これはいいなあ。台の足は付けなくて、真ん中に穴を空ける。そうすれば少々サイズの違う鍋でもかけられるようになるから」と。これも売れて材料が間に合わないくらいでした。また中華鍋の普及に伴い、中華蒸籠の開発もさせていただきました。その時決めたサイズは今でもそのままのようです。しかし、3品目ともに売れて、いよいよ製造が間に合わなくなってきました。どれか一つ手を引かなければ、全部虻蜂取らずになってしまう恐れが生じかねない。悩みましたが中華蒸籠をやめることにし、部落内の同業者はもちろん県内の同業者にも話しますが、跡取りもいなく年配者ばかりになっている状態なので、誰も引き受けてくれる人がなく、やむなく県外の業者の手に委ねることにしました。

◆08 電子レンジとワッパ

しばらく順調に推移して、「これで俺の人生も一生安泰だな」と思われるような良い時期もありましたが、50年代の初め頃だったと思うのですが、問屋とデパートから「わっぱはもう売れないから、作るのをやめるように」との連絡が入り、どうしたのかと行ってみたところ、高級マンションは火災等事故防止のため石油、ガスは使用禁止となった為だと聞かされました。しかし「あのわっぱは便利でいい品物だ」と言って使って下さるお客様はあんなにおられたのだから、「はい、そうですか」と簡単に引き下がりたくないで、「どういうわっぱを作ったら良いのか」としつこいようですが食い下がりました。もうとっくに当時の部長さんはおられないし、相談するところがないので、そしたら「そうだなあ、電磁波ではだめだし、電子レンジで使えるものでないと無理だが、レンジは木はだめというし・・・」という結論になりました。帰ってから、電子レンジについて電気屋さんに訊くのですが、「高周波でねえ。その中の水を3200回こまめに動かして、こうしてものを温めるのだね」と、何回聞いても理解ができず、しまいには新潟県工業技術センターというところまで辿り着いて、色々な講習会に出席して聞くのですがますます理解出来なく、これではだめかなあと思い始めた頃、女房が3人目を出産して、その子の夜中のミルクづくりのために我が家で電子レンジなるものを買いました。昼寝してる時、その説明書を読むともなしに見ていたら、「木のものと金属類は使用不可」となっていました。わっぱの中にはご飯が入ってるのだし、木のみではない。ただ、釘が4本打ってある。これをなんとかすれば良いのではないかと思いつき、さっそく釘を打たないわっぱを作って、恐る恐る1分、あるいは2分、3分、5分・・・と試してみましたが、ご飯は温かくなりますが、木は説明書にあるように炭化したり燃えたりしていない。よし、これならいけると思った途端に、釘の代わりをどうするかということにぶつかりました。職人は一つのやり方を身に着けてしまうと、変更という時になるとなかなか融通が利かないものだなあ、と後になって気が付きました。これは私だけなのかもしれませんが。

◆09 試行錯誤の時期

何回かレンジに入れて実験してるうちに、決定的なダメージが生じました。それは、私のところでは蒸籠で赤飯を作る時は、国内の曲輪の材料のなかで北海道産のトウヒ、またはエゾマツのものが一番適してるということで、それを使用していたのです。この木が電子レンジには合わないことが分かりました。それは、急激に温度が上昇するのでわっぱの外側が乾燥に耐えられなくなる。何回か使用してるうちに割れが生じることがわかりました。そのことを工業技術センターに行った時に話したところ、木竹室の皆さんが親身になって相談にのってくださいました。まず、曲げられる木の種類を調べ出してください、その中から食べ物に合うだろうと思われるもの、そして手に入れやすいもの、しかも国産材で、と絞り込んでみました。そして、実際に良いと思われる材料を集めてやってみました。日本の食べ物は淡白で、そのものの味を大切にするので、レンジにかけたためにできる木の匂いが食べ物に移るような木ではだめなのです。そのために、木の種類も合わせて何種類かの木で実際やってみました。スギ、アカマツ、木曽のヒノキ等々。・・・全部だめでした。そんなことをしているうちに5、6年かかってしまいました。その頃、あるお茶の先生から「煎茶の道具になるのだが、こういうものを作ってくれ」と要請がありました。それは船の型をしたもので、「先の接着が難しいので無理ではないか」と言いますけれども、「お前さんならなんとかできるはずだから、考えて調べてくれ」と言われたまま帰ってしまわれました。どうしたものかと考えていましたところ、ちょうど運よく良い接着剤が出ましたので、それを使って作ることができました。今でもそのものは、その流派の御道具として使用していただいています。前後して、ある問屋さんから「お茶の道具を作ってもらえないか」という話もありました。若い頃デパートで茶道の道具展を見ていて、「いつか自分も作られるようになりたいものだ」と思っていたので、チャンスが巡ってきたのかなあと感じました。スギの木の製品は、お茶の道具はさておいて、一般的には土産品が多いので、「なぜ千利休さんはスギだったのかなあ」と考えながら、一から考えて始めなければならぬと強く思いました。

◆ 10 茶道具に取り組む

今までの篩、蒸籠の材料のヒノキ、トウヒ、エゾマツは、色は白くて、木そのものは割合粘りがあり、少々の無理にも耐えられる木でしたが、お茶の道具は、茶道の創始の千利休さんがスギの赤身の柀目と指定されているので、それに則りサイズも決まっているので、それに添って作らなければならない。スギの赤身というのは、ヒノキなどと違い木そのものに粘りが少なく、製造上、手の感触が違います。慣れるまで苦労しました。それと材料そのものが、材木屋さんのところでは「建築用の材料ばかりでこういう木はない」と言われ、入手が困難であることもわかりました。やむなく、建具屋さんをお願いして少し分けていただき、見本的に水指と建水を数点ずつ作り、納めました。問屋さんはそれを持ってお得意さんにまわってみたところ、「なんとかいけそうなので、もっと作るように」と言われましたが、建具用の材料を仕入れて作っては採算が合わないので、森林組合に相談しましたところ「秋田スギの丸太を買ってするより方法はない」という結論に達し、そうすることにしましたが、木は製材してすぐには使えない。2、3年乾燥させなければなりません。それまでの間の手当てとしてヒラマサの乾燥材を手配してもらい、製作に入りました。一方、世の中は大型量販店の進出で、デパートといってもその波の煽りを受けて、採算部門の家庭用品売り場を縮小し、テナント貸しのところが多くなり、裏漕しも売れなくなってきました。合わせて、外食産業の進出で家庭で料理を作る人が少なくなり、拍車が掛かります。「新しい道としてお茶道具づくりも手掛けていかなければ」と思いを新たにして取り組んでみることにしようとしていたところ、「父が亡くなって3年忌が済んだので、奈良の本山へお参りに行くように」と母に言われるので、出かけることにしました。「お茶道具をするには、やはり京都の問屋もまわって様子を聞いたほうがいいし」と思い立ち、出かけました。京都の問屋さんたちの間では、新潟県のものづくりをあまり高く評価していない様子でした。「新潟は水屋もんが多くてねえ」という言われ方でした。奈良県の桜井市に何十年の間取り引きのある曲輪屋さんに寄って、電子レンジで使えるわっぱの開発の話をしたところ、木場へ連れて行ってあれこれ木を見てくれて、「これでやってみたら」と言って、車のトランクにいっぱい積んで帰りました。

◆ 1 1 何とかしなければ

奈良から持ち帰った木で製材の仕方、厚さなど色々変えてみては繰り返し、何回となくやりながら、これなら良いという方法が見つかりました。この木もヒノキなのですが、木曽のヒノキと違い匂いが非常に少なく、「これならば良いのではないか、あとは釘だなあ」。どうしたらいいか改めて考えてみたら、「昔ながらの蒸籠づくりの技法でいいんだ。蒸籠には釘は使っていないのだから」と気が付いて、そのように作ってレンジに入れてみたところ、何事もなくご飯は温まります。さっそく5、6個作り工業技術センターへ持って行き、今までの懸案はこれでクリアしたのではないかと思われるので試してみて欲しい旨申しましたところ、「今、食品研究所である食品会社で冷凍のご飯を開発中で、その試験もしているので、それと一緒に試験をしてもらえるか訊いてみるから、置いていきなさい」と言われ、お願いして帰りました。これで電子レンジで使用可能のわっぱは試験結果待ちとなり、今度はお茶の道具づくりに専念できると楽々して掛かり始めましたが、どうにも京都のお茶道具の間屋さんたちに言われた「新潟のものは水屋もんぱっかりでねえ」ということが気になってきました。「いくら腕を磨いて、いい材料を使って、いいものを作っても、そういう先入観で見られては高くは売れないなあ」と思いながら、それとなく気に留めて、東京へ行った時とかそれとなく訊いてみると、「工芸品はやはり京都のものが一番で。金沢の加賀の加賀もの、仙台を中心とした伊達ものも特徴があつてねえ」という返事。また、工業技術センターへ行くと、金属関係の方は大量生産、自動化、いわゆるロボット化の指導と研究が活発でした。そんな様子を見たり聞いたりしている反面、木竹室関係の我々の方の話は「この仕事は俺の代で終わりにしようかと思っている」というような話が多くて、先が案じられるような気分になったりしていました。特に、手作りのこれらの技術を資源の一つだと考えてみた時、これで辞めたとしたら資源の枯渇につながるのではないだろうかと思い、工業技術センターの室長さんたちと機会ある度に話し合い、まだこうしてみんなが頑張っている間になんとかしなければと、それにはやっぱり気のある人たちで集まりを作ろうという結論になりました。そして、木竹室で職人さんたちに話しかけてみることになりました。

◆ 12 クラフトマンクラブ発足

工業技術センターの呼びかけでしたので意外と良い反応があり、みんなで喜んでいました。そんな中で、食品研究所へ試験に出していた私のわっぱも良い結果が出ました。「特に冷凍のご飯をこのわっぱに入れてチンすると、なぜかおいしくなります」という報告文が付いて参りました。電話でも「越路早生のご飯をこれでチンするとコシヒカリになるいね」と言われ「なぜそうなるのか、調べなければならぬか。それをするにはしかもお金がかかるが、どうしましょうか」と言われましたが、もうすでにデパートにはルートがなくなっているし、販売先についての目途のない中、余計な出費は控えたいと思いそこまでしてもらいました。これが、昭和の終わり頃から平成の初め頃でした。このわっぱづくりに関わって指導してくれた人たちから、「足立さん。この電子レンジ用のわっぱを科学技術庁長官賞に申請してみたら」と言われました。「人目が悪いこと言わないでくれ」と答えていましたが、他の木竹室のみなさんも「出してみなければ分からないから、申請してみるように」と勧められ、室長さんまで「申請書の書き方は指導するから」と再三進められましたので、そうすることにしてもらったところ、「昔からの技術を今の先端の電子レンジに合わせて、しかも結果ご飯がおいしくなる」というところを評価されて、創意工夫功労者として科学技術庁長官賞をいただくことになりました。平成の3年の年でした。受賞者の名簿を見ると、大企業の研究機関の人たちとか、各省庁の研究所の人たちばかりで、『なにになに商店のなにがし』なんて私ばかりで、恥ずかしいやら嬉しいやら、複雑な気持ちでありました。一方、職人たちの集まりの話も順調に進んで、いよいよ具体的に設立に向けた準備に入らなければならない状態となって参りました。「会の名前は何と付けるか」「会である以上規約はどうするか」「今までの流れの中でジリ貧になっていくのではなく、その中から新しいものづくりや道を探っていく会にしなければならぬので、カタカナの名前にしよう」と、“新潟県クラフトマンクラブ”と命名しました。また、会則の2条には「本会は、県内の木竹材及び異種素材から製品、販売まで、幅広い異業種の人々の集まりで情報交換を活発にしながら経済活動を促進し、かつ会員の経済的地位向上を図ることを目的とする」と定め、平成3年に佐渡市の小木町で設立総会にこぎつけました。

◆ 13 ゼロからの出発

平成3年に、いよいよ新潟県クラフトマンクラブも会員およそ60名で発足しました。事務局は、会員が県内一円と広範のため、会員の中の誰かにということは無理なので、工業技術センターの木とか竹の方の担当の、木竹室の室長の小川さんはじめ、みなさんをお願いし引き受けていただきました。さてこれからどうするかという段になりますと、色々意見が出ます。例えば「みんなはものづくりなのだから、工芸作家を目指すべきだ」とか、「いや、自分はそんなことより、今現在自分が作った物がいかにしたら売れるようになるのか指導してもらいたい」、中には「工業技術センターの呼びかけであったのだから、何かうまい話でもあるのかと思って期待して入ったのだが・・・」等々。正直、私自身の中でも「新潟県の“物”は質実ともに良いものであると、消費者のみなさんから認めてもらえるものづくりの職人の会になりたい」という漠然としたものだけでした。そうなるには、どういうプロセスで行ったらいいのか示すこともできないまま、1年、2年と時は過ぎてしまいました。その間に小川さんは退職されてしまいました。新しく就任された坂田さんに事務局のことを改めてお願いし、今後の指導のことも合わせてお願いしましたところ「うん、わかった。やる以上、一生懸命頑張ろう」と快く引き受けていただくと同時に大変な激励をいただき、力強さをひしと感じました。ところが、事務を担当していただいている係長さんに「発足以来、退会者が多くこのままでは成り立たなくなるのではないかと指摘されました。このままでは消滅しかねないと、私も強く感じていました。「もう集まっての小田原評議はこれくらいにして、具体的活動に移行しよう。そうしながら新会員も募っていこう、という方針で進めよう」ということになりました。何か一つでも具体的に動き出すことで、次の動きが出てきたり、見えてきたりするものだと、意見も一致しました。「それでは何をやるか」ということになりますが、会員同士どんな物を作っている人なのかお互いを知り合い、他にも知ってもらうためにもなるカタログを作ることから入ろうということにして、次の集まりで提案することにしました。集まってもらい話しましたところ、「補助金は出るのか」との質問。「そういう予算はない」と室長さんの答え。私は「他をあてにした考えはやめよう。自分の商売なんだから、自分たちのできる範囲内で頑張っていこう」ということで了解していただきました。

◆ 14 新聞報道をきっかけに

さっそくカタログ作成委員会を構成し、作業に取り掛かってもらいました。それぞれの商品の写真と、モットーひと言と、住所、氏名の原稿を集める手筈を整え、みんなに通知を出しました。会員の中で原稿を私のところへ送ってくる人もあり、それを広げて点検しているところに、「前を通りかかったので寄った」と言って新聞記者が仕事場に入ってくられました。どうぞ、と言って粗茶を差し上げ、世間話をひと言ふた言交わしているうちに、私の仕事台の上に広げられている原稿に目を留められ「それ、なんだね」と訊かれたので、クラフトマンクラブの立ち上げとカタログ作成の話をしました。「これはおもしろい話だ。俺、記事に書くいね」と言われるので、「ちょっと待ってくれ。事務局へ連絡してみるから」と電話したところ「間違えがあってはならないので、こっちで取材に応じるから」との返事でした。その旨伝えると、「さっそくこれから行く」と言って行かれました。それから2、3日後の平成5年2月4日付の朝刊に、『手作りの火を消すな～県内の職人さん38名が大同団結、ブランド化目指す～』などと大きな見出しで報じてもらいました。今この新聞を出して読んで見ると、「大量生産、大量消費が進む一方で、手づくりの良さを求める消費者が増えている。ところがそれを作る技能者は跡継ぎのいない一人親方が多く、流通やニーズなどから取り残されがちである。さらに、職人さんたちは売り方が分からない。そこで、こういう作る人、売る人、材料を出す人が一体となれば、生きる道を探れると思う」などと、大きく報道していただきました。カタログ作成委員会のみなさんはじめ、会員もこの記事に触発されてますます張り切り、3月末に素晴らしいカタログが出来上がりました。また、古町にあるデパートから「今日の新聞を読んで電話しているのです。午後から会いたいのですが」という電話をいただきました。もちろんその日は仕事をしていましたので、どうぞどうぞと申し上げて電話を切りました。どんなことなのかなあ、いい話だといいいけどなあと期待しながら、お出でになるのを待ちました。

◆ 15 第1回新潟県のクラフト展

デパートの方は午後1時ちょうどに来られました。家に入ってもらってから名刺交換をしました。催事課長さんでいらっしゃいました。そして「新聞を読んで、職人のみなさん頑張っておられますが、私どもも地元の百貨店として何かお手伝いしたいのですが。いかがでしょうか」。冒頭からそんな話でしたので、返答に困惑したまま聞いていました。「物は、作ってばかりいても、お客の欲しているものが分からないと何を作っていいか分からなくなってしまうものですから」とも言われます。そして「みなさんがやってみようということであれば、7階の催事場を1週間空けますから相談してみてください」と言って帰られました。さっそく工業技術センターの事務局へ電話をし、その旨話し、急遽役員会を開くようお願いしました。デパートを交えて役員会、全体会議と数回繰り返し開き、相談の結果、8月末から9月初めの週の1週間、7階の催事場約半分のスペースを使って実演販売をしてみることにになりました。こういう催し物を体験した人は2、3名で、あとほとんどの人は未経験なので、不安を持っている人がほとんどでした。「今まで出している問屋から苦情が来ないだろうか」「値段はどうつければ良いのだろうか」とか、今考えてみますと初歩的な心配ばかりでした。私自身も、若い時からデパートからは品物を買ってもらっていましたが、催事とか実演販売などの体験はないので、不安はありました。しかし「やってみなければ分からない、とにかくやろう」ということになりました。催事の名前、テーマと話を進めました。『新潟県のクラフト展～ぬくもりのある手づくり品の実演即売会～』と決まりました。これでほっと安堵したら、「催事には回数を入れよう」という意見が出て、「いやあ、先のことは分からないから入れない方がいい」という意見。我々はもちろん努力し、デパートも「育成ということで、売り上げがないからこれで辞めるなどと言わず、お互い長く続くようにしよう」ということで『第1回』ということになりました。いよいよ初日を迎えました。みんな準備万端整えて迎えたつもりでおりましたが、売ることが分からない者ばかりなので、デパート側の売り上げ目標には遠く及ばないうちに終了してしまいました。しかし、今後のものづくりのためには多くの何かを心の内に感じたようでしたので、反省会をしっかりとやらなければならないと事務局と話し合っていました。

◆ 16 次のステップ

第1回新潟県のクラフト展が終わって熱の冷めないうちに、工業技術センターの会議室でデパートも加わってもらって反省会を開きました。まず、初めてのことでただ無我夢中であったということに尽きるようでしたが、デパート側から「品物の並べ方が下手だ。もっと空間を活かして、お客様が見やすいように並べなければならない」「お客さんにものを訊かれたら、もっと丁寧に説明しなければならない」等々指導していただいているうちに、徐々に会員の方もほぐれてくるというか、口も動くようになってきました。「デパートは、ちゃんと説明せえと言われても、あんなにいい服装した奥さん方に何か言われてもどう答えればいいんだか、ただドギマギするだけだね」とか「もっとしっかりと仕上げるといい商品になると言われても、問屋に値段を割かれているから無理だね」とか。中に、お手伝いに来られたある会社の奥さんが不思議な事を発見しました。それは、私のところの工場から出ていく品物と、この度売れていく品物が違うということが分かりました。これらの反省を踏まえて、事務局とこれからのクラブの方針について話し合ってみました。まず、現在各々が製作してる商品の質を上げなければならない。合わせて新商品開発もしていかなければならない。まだまだ挙げればキリがないが、とりあえずこの2点に絞っていこう、ということになりました。方策については、お互い考えて後日また相談しようということにしました。その結果「新潟県のものづくりの向上と、デザイン力の向上を目指しているIDS財団という県の機関があるが、その総合プロデューサーである黒川玲さんの指導を受けてみたらどうか」と、工業技術センターの木竹室長であり我々クラブの事務局長である坂田さんから提案がありました。「いいんじゃないですか。役員会に諮りましょう」ということになり、役員会も了承していただき、まず来年の新年会にお招きしてみんなに会ってもらおうということになりました。新年会当日、時間より少し早めに黒川さんはお出でになり、時間通りに始まりました。黒川さんの挨拶の開口一番に、「私は“先生”と呼ばれることは嫌いです。玲さん、と言ってください」と言われ、次に「私は江戸っ子です。やるとなったらとことんやりますのでよろしく」。そして冷やのお酒をぐいぐいと飲んでおられるので、「飲みっぷりも江戸っ子だなあ」と見ていました。

◆ 17 厳しい指導

さっそく、黒川玲さんと事務局で都合のいい日を打ち合わせて、どういう指導をしていたら効果があがるか相談しました。それぞれの主力商品を持ち寄り、それを見ながら指導してもらおうということで、指導会を開くことにしました。会員のみなさんも、こういう指導会は初めてなもので、緊張した面持ちで工業技術センターの講堂にそれぞれの商品を持参して集まって、待っておりました。時間になると、黒川さんがおいでになるやいなや「物はどこにあるの。物のないのに何を指導するの。持ってきてあるなら全部出して並べなさい」。みんなで慌てて机を出して、その上に持参した物を並べました。「ではこれから始めますが、私が商品のところへ行ったら本人はその前に来てください。他の人は人ごとだと思わず、話は聞いてください。参考になるはずですから」ということで始まりました。「これはどういう人にも買ってもらうつもりですか」「これはどういうふうにするのですか」「どうしてここはこういうふうになってるのですか」。矢継ぎ早にポンポンと指摘されたり訊かれたりするもので、答えるのに四苦八苦でした。終わってみたら、冷や汗がビッショリでした。それでも、こんなに一つ一つの物について指導してもらったことは今までの間になかったことなので、指摘されたことを大切に、次のクラフト展に向けて商品改良に努めました。そして『第2回新潟県のクラフト展』を迎えました。みんな張り切っていました。デパートも集客に一生懸命でした。デパートの売り上げ目標には及びませんでした。全体では去年の第1回の時の倍に達しました。デパート側は不満のようでしたが、会員は「努力した成果が出た」と一応満足のような様子でした。クラフト展の開催中に黒川さんもお出でになり、つぶさに見ておられました。そして「次の指導会のための参考にします」と言ってくださいました。次の年の指導会を計画していただきました。第3回のクラフト展に向けて、みんなで頑張りました。第3回のクラフト展も、お客さんたちの間にそれなりに好評のうちに終わることができましたが、デパート側からは「もっと新しい会員はいないのか」とか「もっと珍しい新商品はないのか」とか色々注文も出されるので、デパートで行われる北海道展とか京都展なども見てまわりましたが、「確かに、我々の物は日用雑貨的な物で派手さもなく、地味な物ばかりだなあ」と思いました。同時に、「新商品開発も大事だなあ」と。「これから一生懸命取り組みなければならない」と強く感じました。

◆ 18 新商品開発に取り組む

新商品開発について、事務局と黒川さんと相談しました。「まだ大量生産の時代ではあるが、手づくり品の良さも理解されつつあるのだから、ぜひやりましょう」ということになり、黒川さんに以後のご指導もお願いし、承知していただきました。その旨、総会の時、話しましたところ、みんな大賛成で取り組むことにしました。私どもの総会と言うと、予算、決算は言うに及ばず、各々が考えていることや困っていること、うまくいったことなど、なんでも話し合うのです。ですから、時間がかかります。その総会も役員の任期は2年ですので、改選の年は工業技術センターで行い、非改選の年は会員の土地へ行き、その地域の勉強も兼ねて行います。佐渡の赤泊、寺泊、村上、三条等々、同じところへ2回行ったこともありました。その度に感ずるところがあるようで、みんなが楽しみにしているようでした。

・・・話を戻します。新商品開発はしなければならぬが、品物を納める問屋もなかなか厳しくなる一方で、「困るのもっとデパートのような売るところがないものだろうか」という話が出てきました。聞いてみると、みんなが大変なようです。わたしも「かつての東京のデパートのルートもなくなっているし、どうしたものか考えなければならぬ」と強く感じました。いくら新商品を開発しても、売るところがなければ何にもならないし。そのことも黒川さんに話し、そんな状況も踏まえた上でやっていただくようお願いしました。黒川さんはそれについては何も答えず、ただ「我ら消費者が欲しがれる物ができればいいのです。頑張りましょう」と言うだけでした。まず、各々が作ってみようと思うものを作ってみる。それを持ち寄って見てもらい、指導をしていただくという方法で進めました。なかなかみんな「これを作ればいい、というものが浮かばない」というのが本音でした。しかしクラフト展で直接お客様と接していたため、それでもどうにか型になっていたと私は思っていました。黒川さんは「これは誰が、どんな時、どういうふうにするの。しかも値段は高すぎます」。会員は「俺たち職人はデザイナーではないので、分からないよなあ」と陰で言い合っていました。それ以降、私も考えてみますと「職人というのはある意味でわがままなんだなあ。自分勝手に作りたいものを作って売れないと言っている面がおおいにしてあるんだなあ」と。「黒川さんの言われることをしっかり考え、身に付けないといけない」と思いました。

◆ 19 思ってもみなかった出来事

総会の時「デパートのように売るところがもっと欲しい」ということについて考えてみましたら、ふるさと村がありました。あそこならば県外客も多いし、宣伝にもなるのではないかと気が付き、事務局と相談し、お願いに行ってみようということになり、お願いに行ってみました。なかなか「うん」と言ってもらえず、県との関係もあるところだから、再三お願いしました。以前は広間の真ん中に木がありました。その周りで実演販売してみるか、ということになりました。みんなも一生懸命でした。そこを認めてもらい、イベントは今年で12回となりました。そして、古町のデパートでのクラフト展も今年で15回目となりました。この間で、開催された東京ドームでの新潟県の物産展への参加、ニューにいがた振興公社が開催する全国規模の物産展への参加希望者の参加のお願いなど、大車輪で働きかけたり、お願いしたりしました。その度に事務局も大変でしたが、会員の希望も一つ一つ成就し、一層商品開発、新分野開発に拍車がかかります。そんな中、会員のなかで跡継ぎが入ったり、また出ていた子供さんが帰って来たりし、さらに活気が出てきます。3人寄れば一つの団体になるということで、クラブ内で後継者会を発足させました。それぞれを応援することはもちろんですが、励ますと同時に跡継ぎの厳しさなども機会をとらえて話したりして、育成することに心掛けていくことにしました。私のところも、平成9年に長男が家に入って跡を継いでくれることになりました。この頃、以前に開発した『電子レンジで使えるわっぱ』を民放のテレビ番組で紹介していただきましたところ、大変な注文が殺到しました。3ヶ月ぐらいで納めなければならないので、せがれにはじっくりと仕事を教えるより、ぶっつけ本番で仕事をさせました。これまでは、このわっぱについて新聞でも掲載していただいたのですが、なかなか売れなかったのです。このテレビ放送を見て、大手出版社の通信販売部で取り扱ってくださることになりました。良いことが重なるときは重なるものだ、と先人から聞かされていましたが、この年は私にとってまさにそれでした。さらに、黄綬褒章受章というまったく考えても思ってもいない出来事で、ただ驚くばかりでした。労働省からの電話で「奥様も同伴で来て欲しい」と言われるので、常日頃“釣った魚になんとか”というような状態の私でしたので、その罪滅ぼしの気持ちで、同伴で天皇陛下に御拝謁して参りました。

◆ 20 職人冥利

ある日、お茶の先生が私の仕事場にお出でになって「この抹茶の篩では、お茶の粉がこうなってしまうのです」と言われます。「それは静電気なんです」と言いますと、「だから、静電気の起かない篩を木で作ってもらいたいのです」と言われ、持ってこられた篩のように作って欲しいと言われます。「木でそのように作るには大変ですよ。作ってみなければ分からないが、値段は高くなりますよ」と言って遠回しにお断りしたのですが、「高くても、良ければいいでしょう」と言って帰られました。黒川さんの「お客さんのニーズをよく聴いて、それに応えるべき努力するのが職人だ」と言うことはこういうことかと思い、新商品開発の一つと心得、頑張りました。そして出来上がりました。使ってみたら大変良く、お茶の味もまろやかでおいしいとのことでした。これをきっかけに次々と要望が出てきて、抹茶の篩だけで絹網のもの、馬毛の網のもの、と5種類になってしまいました。さらに、ある茶道の家元へ行っておられる先生からの連絡で「家元の初釜に使う水指、建水、水注を作るように」と要請があり、図面がファックスで送られてきました。その図面をよく見ると、元禄時代に引かれたものでした。これだけで説明書はないとのこと、どうしてこのように作るのか自分で考えて、納得して作らなければなりません。職人冥利につきる仕事と思い、つかまってみました。3個作るのに5週間もかかってしまいましたが、なんとか初釜に間に合わせることができました。また、新潟のお酒が地酒として、とみに評価が高いのですが、そんな良い酒を作るための麴菌を蒔く篩もたまに作るのですが、これは蔵によって杜氏さんの使い勝手が色々なので難しいのです。良い酒を造ろうとなさっておられることですので、何とかしなければと努力しています。和菓子屋さんのお使いになる篩。料理屋さんの板前さんがお使いになる篩、裏漉し。これらも全ておいしいものを作り、お客さんに喜んで食していただくものを作る時の道具ですから、気を抜くことはできません。また最近になって、一般家庭から蒸籠の修理等が来るようになりました。訊いてみると、「子供たちがおばちゃんが作ってくれた赤飯が食べたいと言うので、蒸籠を直して、お母さんもおばあちゃんに習おう」ということでした。蒸籠を修理しながら「その家の味の伝承にも一役買ってるのかなあ」と、良い気持ちになります。この放送で私の出番は9月いっぱいですので、次からは『新潟のものづくり 百年物語』を少しお話しします。

◆ 2 1 百年物語のスタート

平成15年に、県の機構改革の一環で、地場産業の育成と活性化を目指して、中小企業振興公社とIDS財団、工業技術総合研究所が一緒になって、新たに“財団法人新潟産業創造機構”が発足しました。長い名前なので、略してNICO(ニコ)と呼称し、万代島ビルの中に事務所が置かれました。クラフトマンクラブの事務局もそこで引き受けていただくことになりました。そのNICOの新しい事業の一つに『百年物語』というものがあります。これは「使い捨ての風潮の中にあって百年くらい使えるような、しかも世界に通用するものづくりを目指して、新たな市場の開拓にも繋げよう」という大変なものです。そして「ドイツのフランクフルトにあるアンビエンテメッセで開催される、日用雑貨の見本市としては世界で一番規模が大きく、そしてその年の一番初めに開催される国際見本市に出品するのだ」という説明を聞いていると、まるで遠い国の物語を聞いているような気分でした。ところが、「足立さんは入れ子を作ってください」と言われました。しかも「佐渡の無名異焼の急須と茶碗とで組んでもらいます」とのことでした。考えてみると、外国には曲物なんてないのではないのでしょうか。「たしかに台湾には中華料理に使う蒸籠はあるが、ヨーロッパの食文化はまた違うので、曲物の器や道具など考えられない」とお断りするのですが、「今回はテーブルウェアなので、考えてください」と言われ、何をどう作ればいいのかしばらくの間悩みました。入れ子と一口に言っても、何と何をどう入れるのか、その見当すらつかない。歴史と文化を背景としたものづくりを目指した商品開発の事業ですから、もう一度原点に立ってよく考えてみることにしました。結果、我ら職人の世界には午前と午後“一服”という時間がありました。1回が15分くらいから30分くらいですが、これは身体を休めるだけでなく、ここまでの仕事の反省と、次の仕事の段取りと見通しを立てて進める大事な時間だったので、現在は機械化とか効率が優先して軽んじられてしまいました。そこに思いを馳せて、茶筒、水注、建水、茶托、それにお茶菓子を入れる銘々皿を一揃いとして、30cmの茶櫃の中に納まるようにしよう。そして、スギの柱目の美しさを見せるように作ることにしました。

◆ 22 百年物語のものづくり

茶筒、水注、建水、茶托、銘々皿を30cmの茶櫃に効率よく収めるには、どういうふうに作ったらよいか。デザイナー、NICOのスタッフのみなさんと、今度はスーパーバイザーになられた黒川玲さんと、私の技術と侃々諤々の結果「丸を6等分にし、真ん中に急須を置いて、その周りにそれらを入れるように入れ子しよう」ということになりました。曲物というのは丸が原則で、せきさか、楕円でも難しいのですが、直線の部分が3カ所入れるように作らなければならないので、私のそれまでの技術では無理と思いました。しかし「やってみなければ」と思い、挑戦してみることにしました。何回も試行錯誤しました。また「大陸では湿度が低いために、日本で作った木のは狂う恐れがある」という話を以前に聞いたことを思い出し、「それらに対応するように作らなければ」と新たな課題もありました。やっと出来上がって商品開発指導会に持参しましたところ、「水注の口が良くない」と言われました。木のもので、注ぎ口は強さが無いともげてしまうと考えるカシの木で作って着けたのですが、「やっぱり、共木でもっと小さく、かわいらしく作れないか」と言われます。どう作ったらいいか、なかなかイメージが湧きません。そんな時、1歳の外孫が来て「じいじ、じいじ」と言っとなつて、一緒に風呂に入って洗ってやっている時、ふと「この子の口元だな。このような型にすればいいのだ」と思い、さっそく翌日かかりました。「うん、これならいいだろう」と、NICOへ持って行って見せたらOKが出て、それを写真に撮りデザイナーに送ったところも、ここもOKが出てほっとしました。全員の作品が揃ったところで写真撮り。カタログ作りはNICOの皆さんが一生懸命進めてくださいましたが、ドイツのフランクフルトというところについて情報は少なく、調べる手掛かりも少ない状態でしたが、中に2、3人ドイツへ輸出している業者の人がいたので、その人たちの情報でなんとか輪郭は大雑把につかめることができました。私も、前に話しましたマイスターのクリストフ・ヘンリッセンさんに、NICOから「可能な限り教えてもらおう」ということにしてもらいました。そして見本市の開催期間中、私にも行くようにと言われますが、その実海外旅行はしたこともなく、まして飛行機に乗ったこともないので不安でした。「何をどう準備すればいいのかわからない」と申しました。「まずパスポートを取りなさい」から始まって教えてもらい、最低限の準備を整えました。「12時間くらいはこは吸えないからね」・・・不安も限界まで達したような気分でした。

◆ 23 ドイツの国際見本市へ

フランクフルト空港に降り立った時「若い時からなんとなく憧れていた国ドイツ、とうとう来ることができた」と感慨ひとしおでした。ホテルは郊外で、電車で40分くらいのところでした。みんなで連れ立って、会場のアンビエンテメッセの中にある駅に着きました。東京ドームのような建物が1号館から10号館まであり、渡り廊下はあるのですが、外に出るとシャトルバスが運行されていて、一つの町内くらいの広さです。出店数は世界で厳選された4000社だそうです。入場者は、これも世界中のバイヤーが約15万人くらいだそうです。たまたま、東京の知り合いの間屋さんに会いました。その人は「全部なんてまわりきれないので、事前に調べて数百社くらいに絞って回るのですが、この5日間でそれだけでも全部まわりきれんかどうか」と言っておられました。新潟県は、1年目は3号館でした。NICOのスタッフの皆さんは、和服を着用して対応しておられました。私は「自分のものには興味を持つ人はいないだろう」とたかをくくっていました。3年前に我が家に見学に来た、『日独学術交流会』による留学生に連絡をとってもらいましたところ「足立さんは言葉がだめなので私がお手伝いに行きます」と言って、2日目に来てくれました。彼女はフランクフルト在住で、1年前に結婚して弁護士を目指して勉強中だそうです。そんな人なので、ものにはあまり興味はなさそうで、フランクフルトの街を案内してもらい、ドイツの暮らしぶりとか社会情勢とかを聞きながら楽しんで戻ると、NICOの人たちから「留守中に何人もお客さんがあって訊かれるのだが、足立さんはいないので、こっちで対応しておきましたよ」との話でした。最終日に、通訳の人の案内で手工芸館へ見学に行きました。その時、路面電車に乗ったのですが、ある停留所で老婦人が降りるべくドアを開けようとするのですが、開けられません。他にドイツ人の乗客もたくさんいましたが、気の毒に思い、立って行って開けてあげました。老婦人は降りてからこちらを振り向いて、いい笑顔をして手を振ってくれました。翌年の2年目の製作テーマは『お茶』になりましたので、茶筒を作って参加することにしました。茶筒というと丸が普通ですが、曲木で作るために金属のようにきれいに真円が出せないで、使っているうちにふたの開け閉めがうまくいなくなるために、壊してしまう恐れがあるので、楕円形に作ることにしました。更にモダンにと思い、銀の延板で桜の皮のように仕上げることにしました。

◆ 24 よりよいものづくりを目指して

フランクフルトの国際見本市が終わって品物が返送されてくると、東京日本橋にあるNICOPラザで展示会をし、これで国内の発表会として、それから各社それぞれ商談に入ります。しかし「県内での発表の機会と場所がないなあ」と思っていたところ、新潟市西堀にあるデパートの催事場で発表会を開催することになりました。この時、東京の本部の社長さんがお出でになられ、物を見られて感心されたそうです。さっそく、デパートの6階に百年物語の品物のためのコーナーを設けてもらうことになりました。私も2、3回、宣伝のために実演販売に行きました。国際見本市での評価については、その場ではなかなか出なかったのですが、後日になって送られてくるデザイン関係の雑誌等を見せてもらうと、高く評価されているようです。2年目からは、一般の実用雑貨部門の3号館から、デザイン性の高い6号館へ展示コーナーが移りました。ここに移ると、確かにバイヤーの人も変わります。私のものも見てもらい、話しかけてくる人はデザインショップ関係の人が多く、次に画廊関係の人でした。仕入れする量が少ないために、運賃負担の関係で商談は成立しないのですが、「これが日本のものなんだ」「木目が美しく、造りが繊細だ」と評価して頂いたことが嬉しいでした。私は会えなかったのですが、ニューヨークのスミソニアン博物館のミュージアムホールの方が、1年前の『一服揃い』を雑誌で見て「ぜひ実物を見たい」と言って来られたそうです。また、ある日本の茶道のドイツでの教室ショップのアドバイザーをしているオットーさんという人が見えられて「日本から来ている道具の一つですが」といって花型盆を出されました。そして「これはプラスチックであるが、あんたの作品を見ていると、これも本来はこのような生地のものであったのではないか、と思うのです。見本的に作って、送って欲しい」と依頼されました。帰国後、調べてみるとオットーさんの言われた通りなので、基本的に沿って作り、私が作った抹茶の篩も一緒に送りました。3回目の製作テーマは『マイツール』で金属関係ですので、ドイツへは行きませんでした。オットーさんの話は聞くことができませんでした。今年は4回目で、この事業も一応区切りのようです。今回のテーマは『酒に関するテーブルウェア』ですので、新しいものに挑戦して参加します。『朝の随想』の出演も今回で終わりです。最後に、ものづくりのあらゆる業種の職人さんたちが、良いチャンスと良い消費者との出会いにより、さらに腕を上げて、よりよいものづくりができることを祈ってやみません。長い間ありがとうございました。